

【モニタリング項目 ID12：林床部の希少種・固有種の分布・生育状況】関連

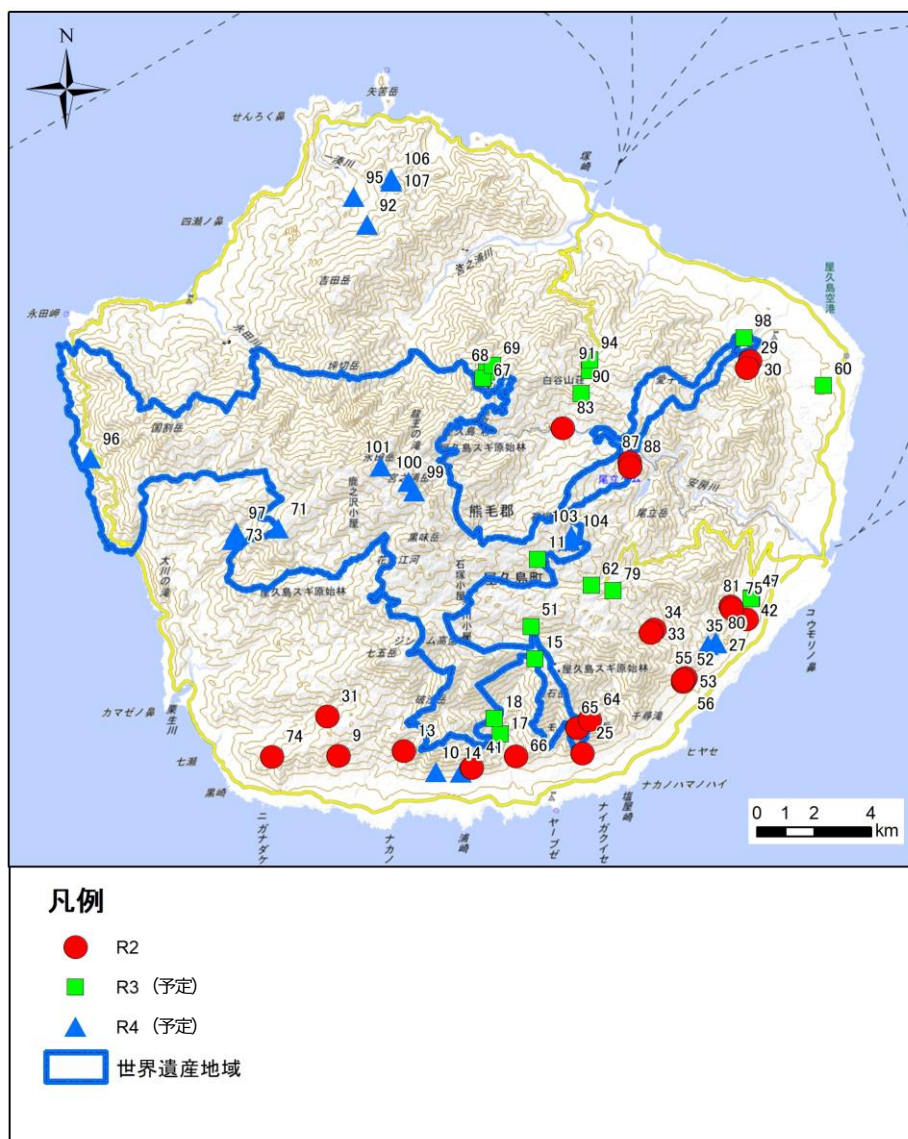
1. 希少種・固有種等の調査（生息状況モニタリング）

(1) 調査概要

・H28 年以降、国内希少種確認地点を中心とした新規モニタリング地点が増加したことをうけて、これまでのモニタリング地点（107 地点）のうち、以下の条件を満たす地点（60 地点程度、調査対象種は 84 種）を選抜し、優先的に調査する予定である（下図と下表）。調査方法は過年度と同様である。今年度は、そのうち 23 地点（調査対象種は 43 種）のモニタリングを実施した（下図：赤丸部分）。

- ① 地生種 5 種以上
- ② 全地点のうち、出現回数が 1 地点のみの種の確認地点
- ③ 20 個体以上の調査対象種を確認した地点

※場所・確認種等の条件が類似している地点は適宜選別している。



R2 モニタリングサイト一覧

モニタリングサイト(No.)	9	13	25	29	30	31	33	34	41	42	52	53	55	56
場所	南部林道	破沙岳林道	モッチョム岳山麓	女川		中間川	小田汲川		南部林道	花揚川	高平岳			

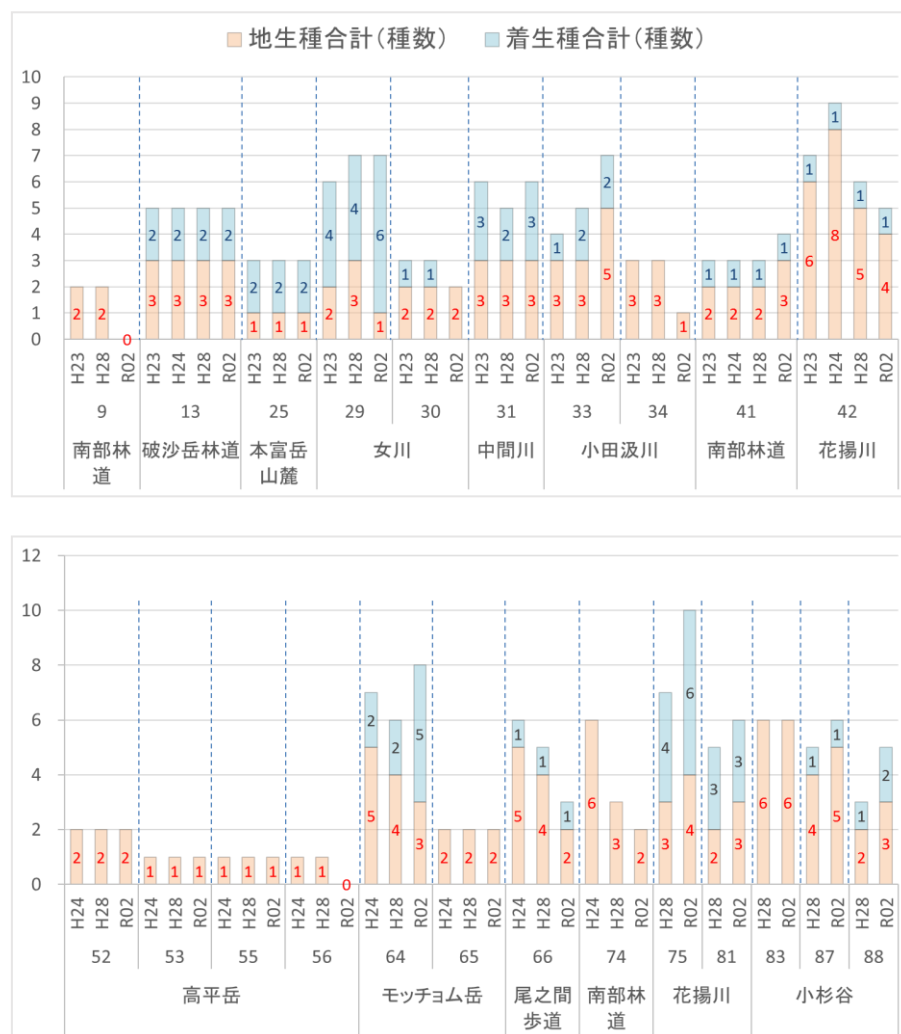
モニタリングサイト(No.)	64	65	66	74	75	81	83	87	88
場所	モッチョム岳	尾之間歩道	南部林道	花揚川	小杉谷				

(2) 実施結果

① 種数の経年変化

- ・ H28 の結果と比較して、23 地点中 7 地点で地生種の種数が消失した種があったことで減少した。一方で、6 地点で地生種の種数が増加した。(下図参照)
- ・ 種数が減少した地点の消失種はツルラン、トクサラン、キシマエビネヤクシマアカシスランなどであった。
- ・ 着生種については、1 地点のみ種数が減少した。

図：各地点の種数経年変化



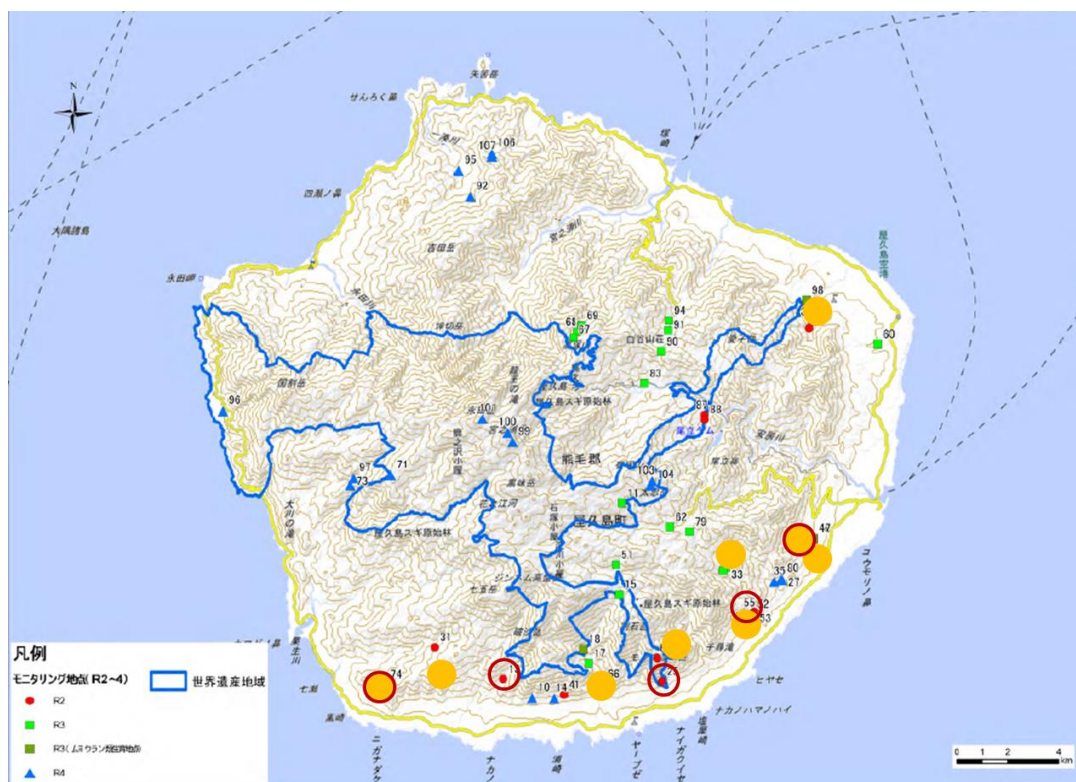
② 個体数の経年変化

- ・ H28 の結果と比較して、23 地点中 11 地点で地生種の個体数が減少した。一方で、11 地点で地生種の個体数が増加した。(次頁図参照)
- ・ 地点毎に、1 種につき半数以上の個体が消失したのは、No. 13、No. 25、No. 55、No. 74、No. 75、No. 81 の 6 地点であった。種としては、ガンゼキラン (No. 13、No. 55、No. 74)、ツルラン (No. 25) などであった。

図：各地点の個体数経年変化



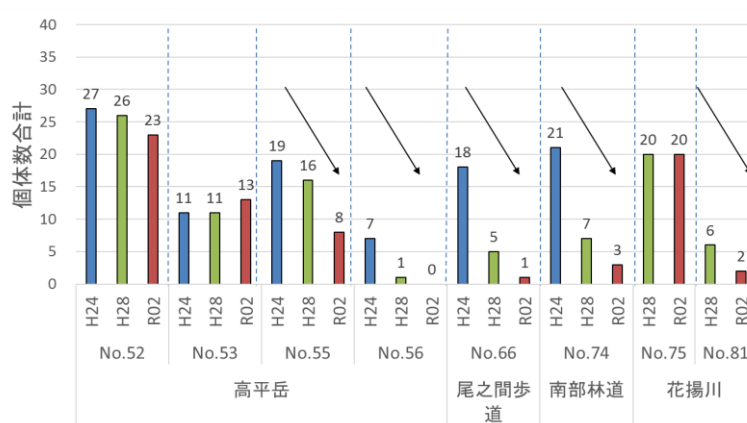
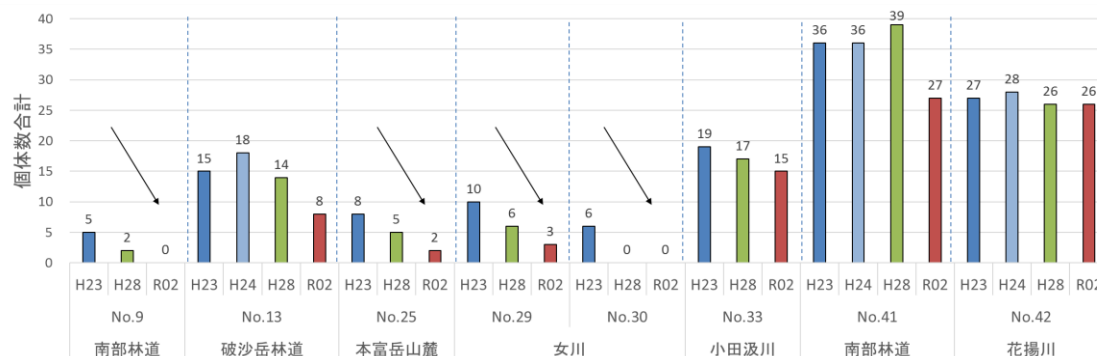
- ・また、H28 と比較して、地生種の種数が減少した点（赤丸）と地生種の個体数が一種あたり半数以上減少した点（橙塗りつぶし丸）を下図に図示した。



- ・①、②の結果より、消失もしくは個体数が半数以上消失した種としては、ヤクシカの嗜好性の高いツルラン、ガンゼキランなどの大型ラン類が目立った。これは平成 23 年～平成 28 年の傾向と同様である。今後、他のモニタリング地点の結果と合わせて考察する必要がある。

③ ツルラン・ガンゼキラン等の生育状況

- ・ヤクシカが好むといわれているツルランやガンゼキラン等の大型ラン科植物に着目し、個体数の変動等を整理した。
- ・対象種は、H28 の手法に合わせ、ツルラン、ガンゼキラン、キシマエビネ、ダルマエビネ、トクサランおよびレンギョウエビネの 6 種とした。
- ・対象種の確認地点は、23 地点中 16 地点であった。
- ・H28 と比較して対象種が消失した地点は No. 9、No. 29、No. 56、No. 66、No. 74 の計 5 地点、対象種が 1 地点につき半数以上減少した地点は No. 13、No. 25、No. 55、No. 74、No. 81 の 5 地点であった。
- ・以下に各地点の対象種の経年変化のグラフを示す。なお、モニタリング当初より個体数が半数以上減少している地点に→をつけている。
- ・対象種の個体数が顕著に減少している地点と維持している地点があり、要因について今後も検討していく必要がある。



④ 国内希少種の生育状況調査

- ・種の保存法に基づき国内希少野生動植物種に指定されている種の生育が確認されている調査区が 23 地点中、6 地点含まれていた。(生息地の情報は種の保護のため省略)
- ・6 地点では、4 種の国内希少種（ヒモスギラン、ホソバコウシュンシダ、シマヤワラシダ、アオイガワラビ）が確認され、過去の調査結果との比較から、地点数の消失や確認種数の減少はなかった。
- ・ヒモスギランが新規に 1 地点で確認された。